覚えておくと世界が変わる
ミクソリディアンスケール、短期マスターコース vol.03

どうも、大沼です。

前回までで、ミクソリディアン関係の基本的なポジションは学びましたね。

短期間で「あれら全てを覚えて使いこなせるようになる」と言うのは、時間にかなりの余裕が無い限りは難しいと思いますので、色々と触ってみて、自分が良く使いそうなもの、使いやすいと感じるものから覚えていってほしいと思います。

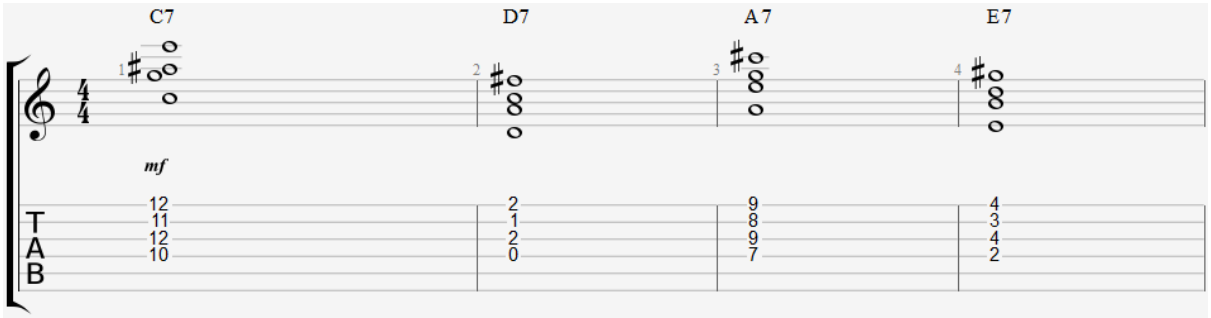
後は、ブルース系のジャンルはもちろんのこと、ロック、ポップス等でも普通に出てくるものですので、コピーしている曲の中で使われていた場合は、何がどうなっているのか？キチンと分析してみましょう。

（※特にギターものの音楽は、ペンタ含め、ミクソリディアン関係は出てきやすいですね）

という事で今回は、前回までの基礎中の基礎の内容には入れてなかったものや、実践的な使い方などを見ていきましょうか。

それではまず、これまでこの講座では載せていなかった、4弦ルートのX7コードのヴォイシングについてです。

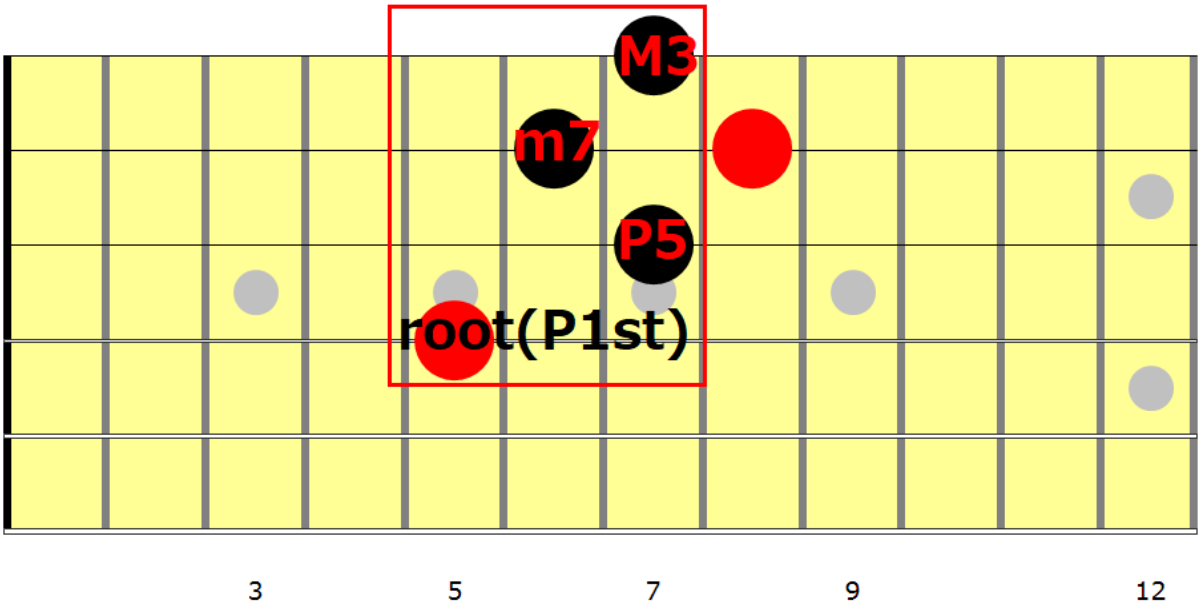
譜例1、X7、4弦ルートのヴォイシング各種



指板上で見る、大元の形はこうなっていますね。

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

図1、4弦ルート、X7のヴォイシングの形

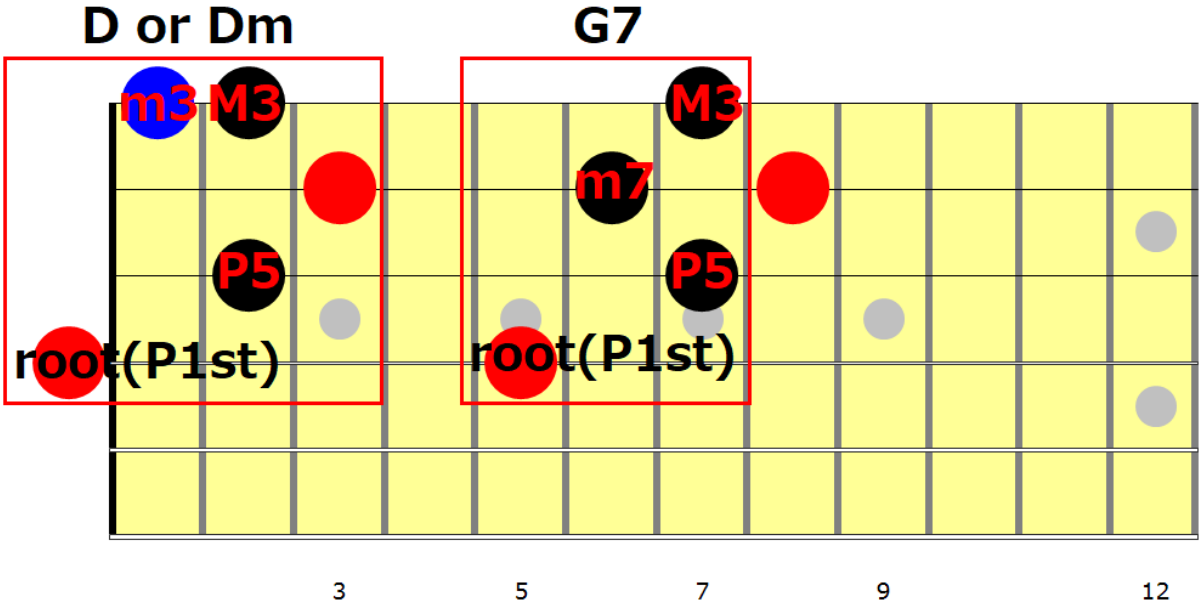


(※この図ではG7の位置で見ています)

文字通り、4弦にルートが来ていて、インターバルは低い弦から順に、root、P5th、m7th、M3rdとなっています。

4弦ルートのヴォイシングで馴染みがあるのは、ローコードのD(もしくはDm)だと思いますので、この形を基本に、どのように構成音が配置されているのかを見比べてみましょう。

図2、4弦ルート、ローコードDのヴォイシングの形と見比べてみる



Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

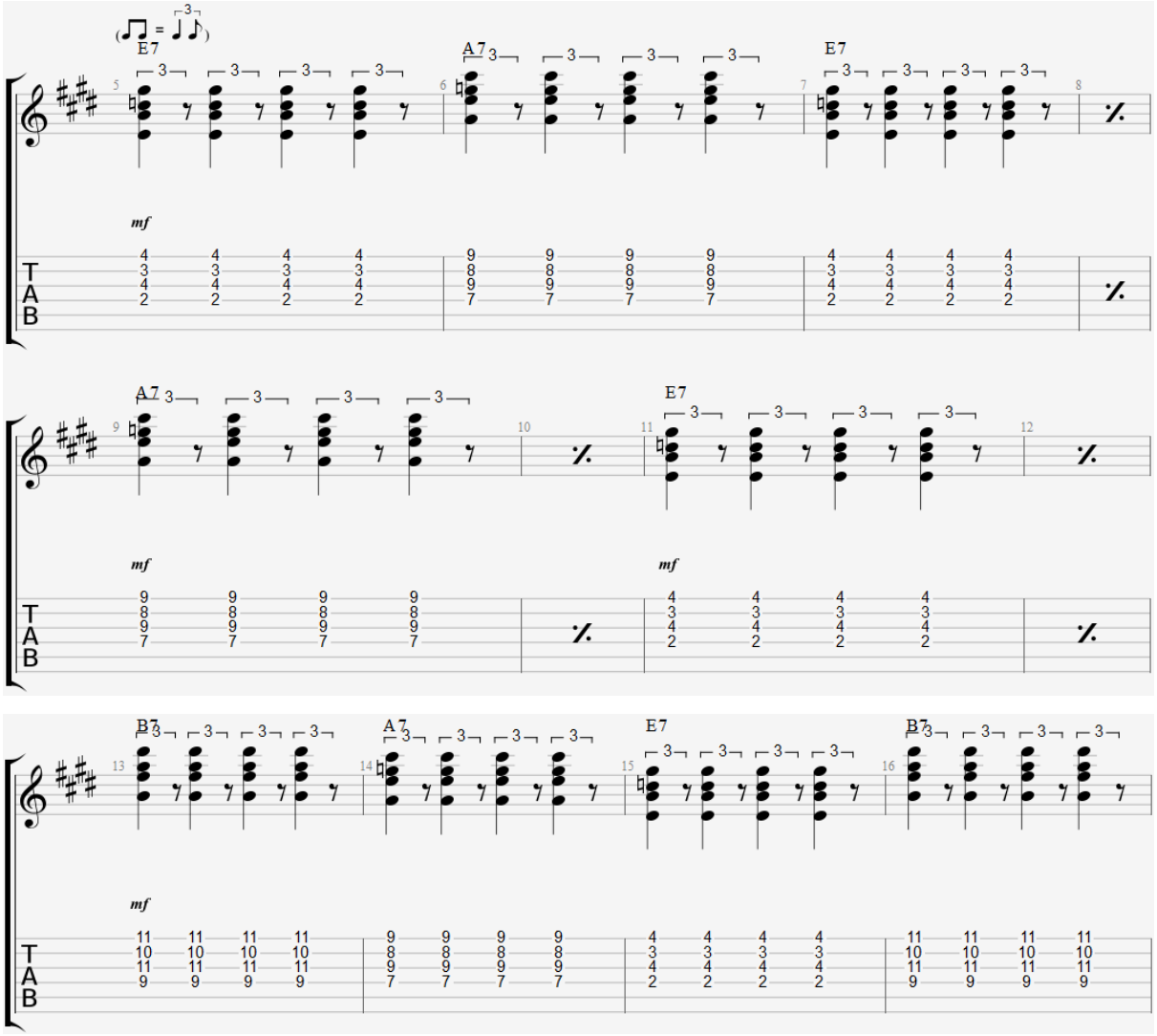
ちなみに、このヴォイシングは音域が高めになるので、例えばギター1本でブルース進行(バッキング)を弾くときなどはあまり出てきません。(※楽曲やプレイスタイルにもよりますが)

ただ、カッティングやコードストローク的なプレイの時には、それなりの頻度で出てきますので、いつでも弾けるようにしておきたいところです。

さて、実際の楽曲ではあまりしない弾き方なのですが、あえてこの「4弦ルートのヴォイシングだけを使ってブルース進行を弾いてみる」と言うトレーニングをしてみましょう。

こういったヴォイシングにもある程度触っておかないと、いざと言うとき、ルートの位置が見えにくく、瞬時に弾けないことが多いものです。

譜例2、4弦ルートのヴォイシングだけで、ブルース進行を弾いてみる(key=E)
(※3連符ウラの8分休符はブラッシングなどでも構いません)

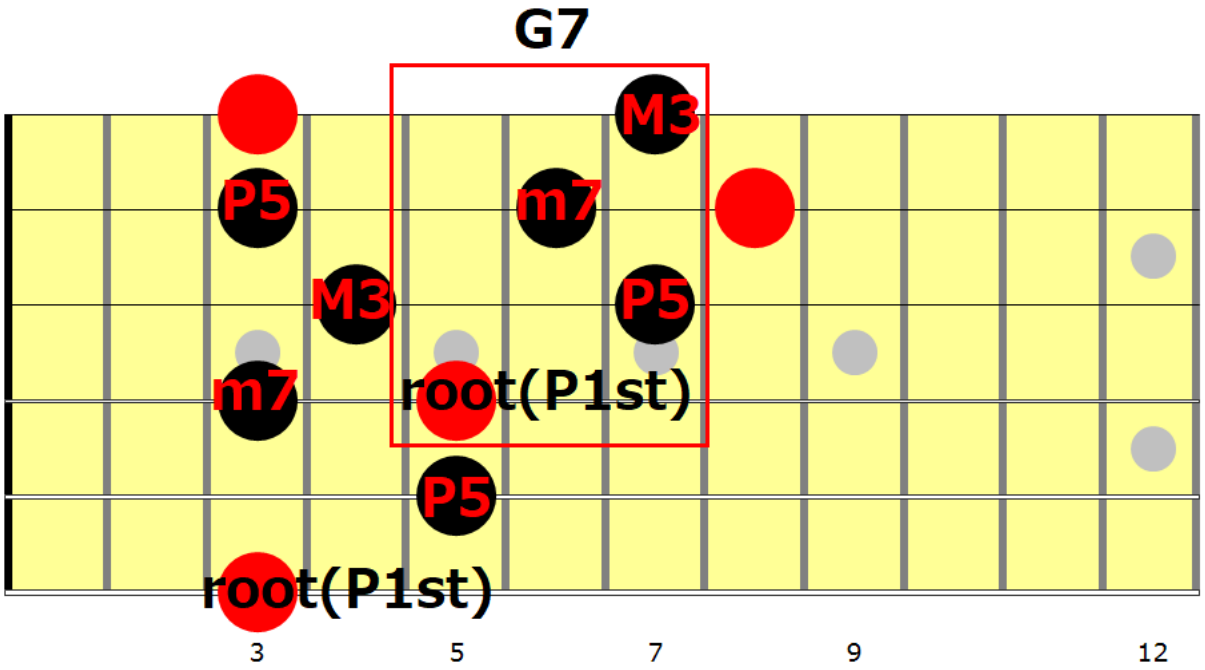


Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

おそらく、これまでこのヴォイシングをあまり触ったことがない場合、コードチェンジの際に押さえる場所に迷いが生まれるはずです。

このヴォイシングをわかりやすくするための、シンプルな見方としては、「先に6弦でルートを見て、そのオクターブ上で4弦上のルートを探す」と言うものがあります。

図3、6弦ルートのX7と4弦ルートのX7の位置関係



(※この図は6弦、4弦ルートのどちらもG7)

ほとんどの人は、6弦上の音配置を4弦上よりも先に覚えているはずなので、こちらのヴォイシングに慣れていない場合は、最初はこうして見ていくのが一番わかりやすいかと思います。

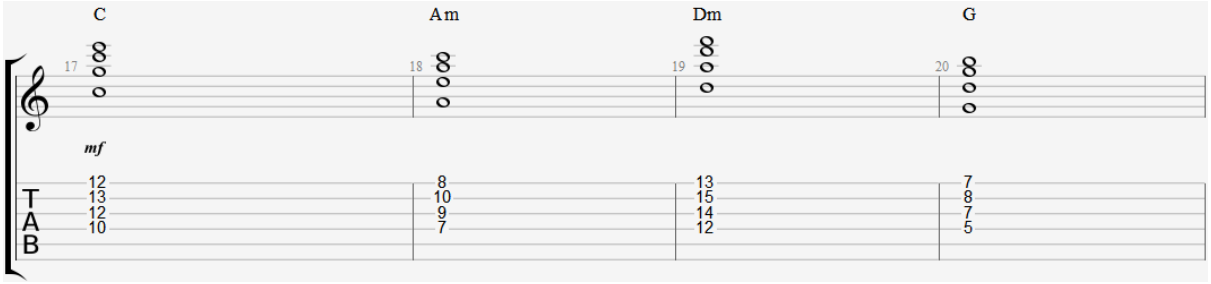
では、譜例2はEキーで行いましたので、4弦ルートのヴォイシングを使って、他のキーでも何か弾いてみましょうか。

例えば、通常の定番進行(例えば1-6-2-5など)をあえて4弦ルートのヴォイシングだけで弾いてみる、という事も出来ますね。

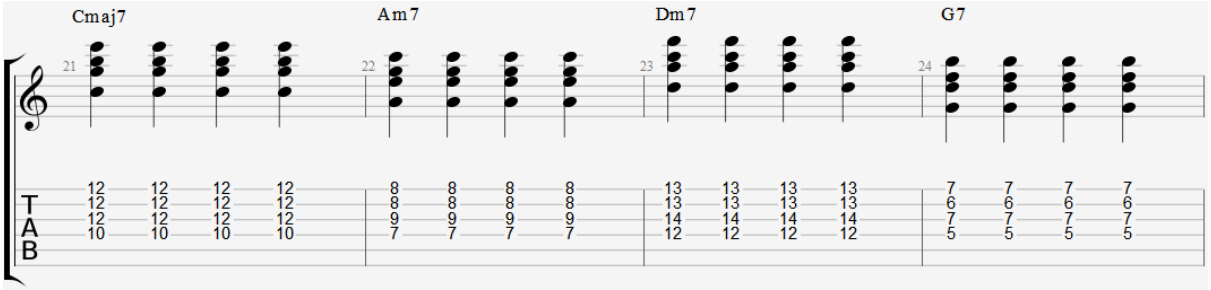
譜例3、4弦ルートのヴォイシングだけで、定番進行(1-6-2-5)を弾いてみる(key=C)

※トライアドの場合

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved



※4和音(7度の和音)の場合



※どちらもリズムパターンは自由に変えてもらって構いません。

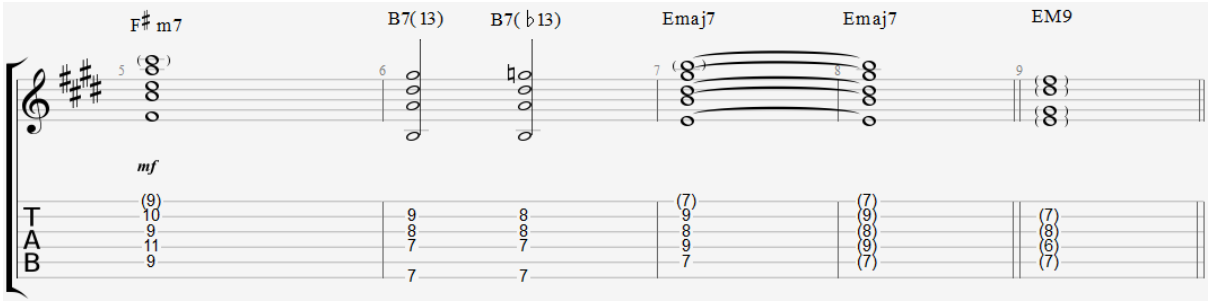
ただ、この様な「とにかく4弦ルートのヴォイシングに限定する」といった弾き方は、実際の楽曲ではほぼしませんので、頭の体操的なエクササイズとしてたまにやってみてください。

次に、ドミナント7th(X7)コードが出てくる代表的な進行である、2-5-1(Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ)の進行上で使う、確実に覚えておきたいヴォイシングを弾いてみましょう。

普通の4和音のヴォイシングは以前のテキストに出しましたので、ここでは13th系と9th系のテンションを加えたものにしてあります。

まずは13th系から見ていきましょう。キーはEに設定してみます。

譜例4、key=E、Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ(F♯m-B7-E)、X7(B7)に13th系のテンションを加える



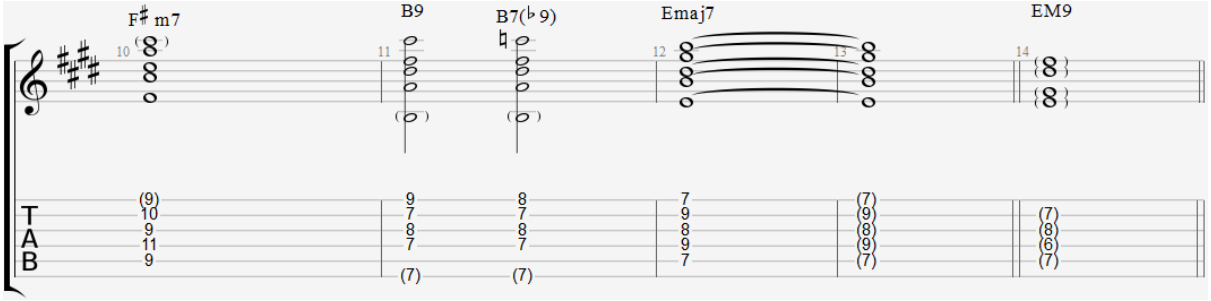
※最後のEM9は3～4小節目のEM7のバリエーションとして載せています。

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

このX7(B7)ヴォイシングはP5thを省略しているものになりますね。やはり、ジャンル問わずよく使うものなので、確実にマスターしておきたい所です。

続いて、9th系のテンションを加えた代表的なヴォイシングです。

譜例5、key=E、Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ(F♯m−B7−E)、X7(B7)に9th系のテンションを加える



大元のヴォイシングは譜例4と同じですが、9度を1弦で取っていることもあり、押さえ心地に結構な違いがあるかと思います。

6弦のルートは、親指で押さえることも可能ですし、省略して鳴らさない、という選択肢もありますね。(※ルートの省略は譜例4の13th系でもあり得ます)

それでは今回最後に、今弾いたEキーの進行上で、全てのコードのコードトーン・アルペジオを弾く練習をしてみましょう。

このタイプの練習(フレージング)は、例えばアドリブ時に、鼻歌や感覚優先で自由にメロディを紡いでいく方法とは逆のものになります。

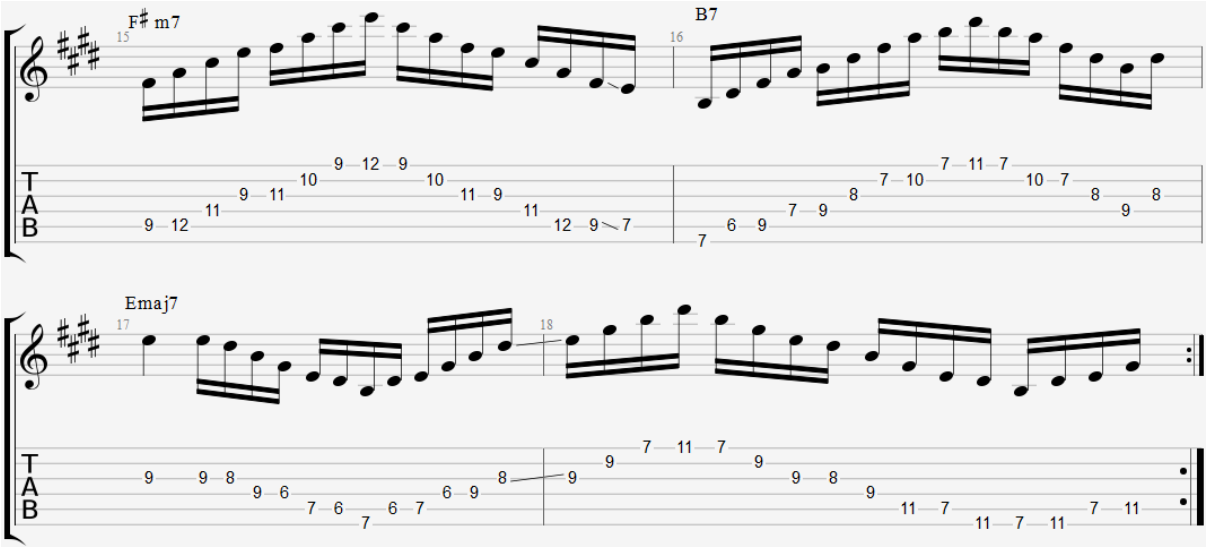
ですが、全ての音がコードの構成音内に収まっていて、100%音がハズれることがなく、形を覚えているのであれば、キーやコードに対して重要な音がちゃんと見えている、という事でもあるので、とても大事な練習だったりもします。

後は、ソロ(フレーズ)作成時のネタ元にもなりますし、アドリブ中に何も弾くものが思いつかない時、緊急避難的にそのまま使うこともできるので、どんなプレイスタイルの人でも代表的な形は覚えておきたいところです。

一応、譜割を16分音符にしてありますが、慣れないうちはゆっくりと丁寧に弾いて下さい。

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

譜例6、key=E、Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ(F♯m-B7-E)、コードトーン・アルペジオ



※この譜例はループ出来る様にしてあります

F♯m7とB7は最も重要な1つの形を、EM7は真下に降りるタイプと、ボディ側に展開するタイプの2種類の形を小節ごとに使い分けていますので違いを確認してください。

実際のフレーズやアドリブプレイとしては、この様な感じで基本のアルペジオの形をそのまま使うこともできますし、途中で分割したり、譜割を変えても良いですね。

音楽とギター構造の理解の面でも、テクニック的な面でも非常に大事な練習になりますので、機会があるごとに色々なパターンに取り組んでおきたいものです。

※こういったコードトーン・アルペジオの練習法は別途配布している【コードトーン・アルペジオ講座】に全てまとめてありますので、そちらも参考にしてください。

それでは、【ミクソリディアンスケール短期マスターコースvol.03】は以上になります。

次回に続きます。

ありがとうございました！

大沼

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved